

5 楽器の装飾性について

(枅谷)「装飾性」のお話に関連して、ロシアのウクライナのメジン遺跡で出た、マンモスの骨で作った楽器、マンモスの骨で楽器を作った...かもしれないというのがあります。復元演奏もされています。必ず骨に彫刻を入れて、オーカーという赤い色を付けて、装飾をしています。たとえば、フルートでも、トランペットでも、金属製の楽器をよくご覧になると装飾をしてある。銅鐸の場合もきらびやかですから、楽器は音を出すだけでなく、「見る」という、その両方の要素を兼ね備えていると思うんです。大型化して、装飾が付いたってことだけで「見る」だけになったというのは、少し偏っているかな、とは思っていますがいかがでしょうか。

(荒山)はい、話題を琴に移しても大丈夫でしょうか？ 実は復元琴を今日持ってきています。1つは、静岡県静岡市の登呂遺跡の琴（弥生時代後期）の復元品【写真8：発表者左手】。実寸大です。スギの木で作っています。もう1つは、静岡市小黒遺跡から出土した琴（古墳時代初頭）の復元品【写真8：発表者右手】。こちらも実寸大です。確かに、これらにも機能的ではない部分があるのです。この2つの琴には、鳥の尾の形をした部分があります。この部分は、楽器として、なくても機能する部分なのですが、音を出す、鳴らすというだけでなく、どうやら視覚的に「見る」という意味でも、造形的に意味がある。この鳥の尾の形が装飾の範疇かどうかはわかりませんが、まさに先ほど枅谷先生がおっしゃっていたとおり、必ずしも音を鳴らすことだけでなくそういう「見る」という要素にも、どうやらこだわりがあったようだ、ということがわかります。

(司会)琴が鳥の尾のかたちをしているというのは、なんとなく信仰的なものも感じるんですけども、そういう要素はあったんですか？

(荒山)実際に弥生・古墳時代の遺跡の木製品の中に、鳥形木製品も出土していますので、どうやら「鳥」にそういうものがあったのでしょうかね。

(司会)口琴には何か装飾的な要素ってあるんですか？

(荏原)装飾性...ものによって、けっこうあります。

(ここで実物を投影)

表面に、マンモスの像、銀細工のマンモスの彫刻が入っています。口琴としては基本的には弁があって枠があるだけでいいのですが、装飾性の高い銀細工がはめられているものもあります。

皆さんから見て右端は、枠自体がワシの形のもので、それから、二番目はシカの銀細工が、これはちなみに、サハで一番著名な鍛冶師が製作したホムスです。サハ共和国大統領（現在は首長）が海外に行くときはこの人が作ったナイフや口琴が、プレゼントとして用いられることが多いと聞いています。あと、地名を真ん中に彫刻して入れているものや、サハで非常に美しく咲くユリの花（サルダーナ）を入れたものもあります。



写真8 復元「琴」の説明

ホムスだけでなくホムス・ケースも非常に美しいです。サハでは、馬は身近な動物です。馬は牛とは違い真冬の期間でも厩舎がなくても雪を掘って自分で草を食べ生き抜くことができます。馬はサハの人々にとって身近な生き物です。-60℃にもなるサハでは、馬肉は貴重なビタミン源です。馬の皮もとても大事に使います。そういう馬と馬の駒繋ぎ棒とのデザインを、こんな小さなホムス・ケースの蓋に、白樺の皮を用いて貼って描いたりするものもあります。

これらは出す音にはほとんど関係はないんです。現在では、政治家のモチーフ、そのほか時代的なものを配したようなホムスも作られて、世界民族口琴博物館に展示されたりしています。

(柞谷) 1 つだけ、鹿笛の装飾のことを。アイヌ民族の、さきほどは装飾のないものをお見せしましたが、裏側を... (実物を投影) ...はい、渦巻き模様がありますよね。この中には、いろいろな思いが多分あると思いますが、これ、オンコの木でできたものですけど、鹿角で作ったものにもかなり精巧なウロコ文様が彫られているものもあります。本州のマガゴと呼ばれる人たちもまったく同じ形態の鹿笛を持っていて、装飾性があるものもよく見受けられます。それから、誰が持ち主かわかるような、ある種の屋号的なもの、ホントに簡単なものですよ、バッテン (×) とかそういうようなものもあります。それを彫ったからといって音色が変わることはありません。

(荏原) 装飾されることによって楽器の音色が違いかどうかということに関連して、これらの口琴 3 本の音色の違いを聞いてください。これは、3 人とも違う鍛冶師が製作したものです。それぞれ、大きさは同じくらいですが、音色は違います。

まずさっき演奏した口琴です。(♪試奏) こんな感じの音。次、黒い焼きが入っています。ピョートル・オシポフさんという鍛冶師が製作したものですこんな音です (♪試奏)。低い音色です。最後に弾かせていただくのは、ミハイロフさんというちょっと若い鍛冶師の製作したホムスです。ちょっとシャープなシャーンという感じの音がします (♪試奏)。

このように、製作する鍛冶師によって、音色...音質自体が、少しずつ違います。こんなふうには、サハで採掘される鉄を鑄造して、口琴は製作されています。もともと鍛冶師は、親から子もしくは師匠から弟子へと技術等が受け継がれ、またシャマニズム的な能力も持っている人たちと言われていました。

現在では、鍛冶師ではない一般のサハ人の中にもホムスを「作ってみたい」という熱が高まってきています。学校の先生などもホムス製作体験ができるように、サハにある北東連邦大学という国立大学の、フィジカル・テクノロジー・インスティテュート技術労働訓練工房というところでは、口琴製作を習うことができるような場所ができています。

6 楽器と信仰、音楽起源論

(司会) 荏原さんがおっしゃったように、こういう金属製口琴があるっていうのは、金属、鉄が採れなきゃ作れないわけです。そういう意味では、風土と楽器文化というのは結びつきが深いものがあると思います。

その一方で、誰でも彼でも鍛冶師になれるわけでもなさそうで、ちょっと気楽にホムスを作ってみようかな、というのはハードルが高そうな感じがします。そういう意味で、鍛冶師というのは、おそらく単なる鍛冶師ではないですね。信仰的な役割や意味合いとか、

先ほどの装飾性とも関わりますけど、こういった道具を作り出す作り手に対する信仰やリスペクト、そういうものも関係があるような気がするんですけど。

先ほどの（古代の）琴にしても、誰でも彼でもというよりは、埴輪の形で残されるくらいだから、けっこう高貴な人が使う道具だったのではと。いかがでしょう。信仰と楽器、その土地で採れたものを加工するということに対する信仰のようなもの、話題などは…。

（柘谷） いいですか？…今の観点にちょっと外れるかもしれないんですけど。（ほら貝を提示）これ、巻貝です。シャンク貝といいます【写真9】。白いですね。チベット仏教では仏教の印（シンボルマーク）がこの巻貝です、いわゆるほら貝です。シャンクという言葉が、中国にわたって「商佉（シャンカ）」になり、そのまま日本に来て、日本でも古い時代では「シャンカ」と言っていました。

白いものは、純粹無垢、神なるものという信仰があるんですね。古い仏教ではこれ（ほら貝）はお釈迦様の声。いまだに日本の仏教でもいろいろな儀式の中で、最初にほら貝を鳴らして、それから何か儀式をする。

また、神道の話になりますが、私が調査に通っている、数年前に世界の無形文化遺産になった早池峰神楽という神楽があります。その神楽を演じる前に、必ずこれを鳴らして「神降ろし」をします。

そういう、素材に対する信仰的な意味、何を使うかという…。音を出すだけなら、別の色は白くなくてもいいはずですが、やっぱりこう白いものにこだわるとか。

私のやっている鹿笛でいうと、これはフランス製ですが、シカの角製です、まさに鹿笛。アイヌ民族の鹿笛は、実はシカの角製は、私が見たのは3例しかありません。ほとんど木で作っています。一方、本州の鹿笛はほとんどシカの角です。そこらへんの信仰や素材に対する思いがありそうです。

…フランスの人たちは角っていうものをどう考えているかという、これ、「トロフィー」といわれています。シカは1人で捕るものでなくて集団で捕ります。矢でも槍でも鉄砲でもいいですけど、最後にオスジカを仕留めた人はトロフィーをいただきます。トロフィーっていうのは、獲物の頭骨の部分、頭から上の部分が語源的にトロフィーといいます。それをもらえる。そしてシカというのは（角が）毎年生え変わります。これは「再生」を意味します。そういういろいろな信仰の中から、シカの角を使うという、そういうあたりも何かありそうです。

ちょっと、うるさいですけどいいですか（♪試奏）。私には耳が痛い。皆さんどうですか。相当うるさい（笑）。まあ、4キロ先にいるシカにもたぶん届いてますね。

（荏原） …サハではもちろん、鍛冶師は、口琴を作るだけでなく、いろいろなもの、畑仕事で使う道具類も作ります。そういう鍛冶師は、シャーマンと同じ巣から生まれてきたと言われてます。有名な鍛冶師には鍛冶屋の守護神というものがついていて守られているから、非常に素晴らしい鍛冶仕事をして、楽器やものを作ってくれるこ



写真9 シャンク貝
（仏教では法螺貝の音は釈迦の声）

とができると言われていました。

私もそういうふうな能力を受け継いでいるといわれる著名な鍛冶師に会ったことがあります。口琴奏者（ホムシスト）が私を連れて行って会わせてくれたのですが、その口琴奏者も非常に緊張していました。ドキドキするなか、いろいろなお話をお聞きしたことがあります。

鍛冶師は、火を操ることに対しての力を持っているといわれています。ですから、一般の人はなかなか口琴作りを気軽にはできなかつたのです。これまでは限られた人のみが鍛冶師の技術等を受け継ぐことができたのですが、教育者や一般の人々の強い関心（鍛冶師への敬意が更に深まる）を受けて、徐々に前述の労働訓練工房などはこのシャマニズム的な力と一見離れた所ですけど、ホムスの製作体験や鍛冶師の育成が行なわれています。大変興味深く実践を見学させていただいたことがあります。

（栢谷）「信仰」がらみで続けていいですか？ 私の最大の研究テーマは、「音楽ってなあに」、今回のタイトルにもありますが、音楽っていったい、ほんとに何なんだろう。何のためにあって、なんで始まったんだろう。いつ始まったかわからないけど、なぜずっと続いているんだろう。そのへんがすごく気になっています。

「音楽起源論」とか「音楽起源説」といって、学問の1つのテーマになっていますが、一番私が興味を持っていることです。そのいくつかの起源説の中に、「宗教起源」説、難しい言葉でいうと「呪詛起源」説というのがあります。「呪」ってのは「まじない」、「詛」っていうのは「訴える」って意味です、「直訴する」の「訴」と同じです。

要するに、まじないであり、訴えることである。これは宗教につながっていきますね。世界の宗教の中で、音楽を伴わない宗教は全くありません。キリスト教は別名「歌う宗教」とも言われていて、歌の力によって全世界に布教していきます。仏教の場合は「声明（しようみょう）」、「声が明るい」と書きますけど、やはり音楽を伴っています。

音楽の不思議な力で人の心を変えてしまったり、あるいは、ある音楽を聴くと記憶をよみがえらせる、という力があるんですね。最近「音楽療法」というのがありますけど、認知症になった方に、その方が若いときによく歌っていたような音楽を聞かせたりすると認知症の症状が改善していくとか、そういう事例もある。音楽っていうのはそういう目に見えない力がある。

さて、「歌」っていうのはどういう意味か。諸説がありますが、「うったえる」ではないかというのがあります。「うっとう」「うったふ」と書くのです。訴えるために、普段の言葉で訴えてもだめだから、いろんなまじない言葉は必ず旋律が付いているわけですよね。キリスト教の讃美歌っていうのは、神様を賛美して、お祈りをするわけです。普段の話し言葉でなくて、特別な発声をしたり、特別な楽器を使ったりして、うったえる。そういう部分で、音楽と信仰というのは、すごく結びついている可能性があると思います。

（司会）先ほど、話が途中になったんですけど、荒山さんに見せていただいた埴輪の、お琴を持っている人物...あれは、どういう人物がお琴を持っているんですか？ 当時の偉い人なんですか？

（荒山）はい、弾琴埴輪はだいたい古墳時代後期、6世紀頃なのですけど、わかることは男性が弾いているということ。それからもう一つ、どういう男性が弾いていたかというところですけど、例えば、髪型等から身分の高い人が弾いていたのではないかと考えら

れる例がある⁴。こういう情報を埴輪の例では得ることができます。出土「琴」だけでは、人とかかわりというのは分析が難しいですけど、弹琴埴輪の場合は、人とモノが造形的に表現されている。もちろん、デフォルメされている部分もあるので、全部このままの情報というわけにはいきませんが、モノだけではわからない情報を得ることができるという点では、大事な資料となりますね。

(司会) 何かの儀礼の中でこういうものが使われた、っていう可能性は当然あるわけですよ？

(荒山) そうですね、この後の時代に『古事記』や『日本書紀』などが出てきますけれども、そういう中でも神事的なかかわりの中で琴の記述が出てきたりします。そういうところとの関連も含めて、日常的に私たちが娯楽で弾くものとは明らかに違うだろうと思います。先ほど、和琴のお話をしましたが、現在の和琴も日常の娯乐的な場面では使わないので、こういう特別な、儀礼的な場面にしか使わない音がある。そういうものの原型となるものが2000年ぐらい前からあることが、考古学から分かっているということですね。

7 儀礼から芸能へ？

(司会) 先ほどから「音を出す」とか「音を出す道具を作る」という部分が、どうも信仰的なもの、呪術的なものと、かかわりがあるのではないかと、という話題になっています。また、柘谷先生がおっしゃったような「音楽の起源」というものとも結びつく要素もあると思います。

そういう、信仰とか呪術にかかわるところで鳴らされていた音が、呪術的な要素や信仰的な要素がだんだん薄れていくとともに、いわゆる娯楽というか、「芸能」化していくプロセス、というものがあると思うんですね。それが、現在の私たちが音楽と思っているものにつながっていくと思うんですが。

そういう、呪術・信仰的なものから芸能化へのプロセス、といった部分で、たとえば現代の口琴なんかはどうなのでしょう。音色自体、呪術的といえば呪術的な(笑)ものがあるんですけど、今、サハの中では、信仰・儀礼とホムスとのつながりが垣間見られるような部分があるんですか？ それとももう、どちらかという「芸能」なのでしょうか。

(荏原) ...儀礼的な場面でホムスが演奏されるということは、現在ではとくには使われていないと思います。ただ、先ほど柘谷先生のお言葉がありましたように、音楽の、音というのは振動ですから、その振動を使った音楽療法的な場面で、一部の名演奏家ですけど「ホムス・セラピー」を行うことがありまして。

ホムス・セラピーの場面で、ホムスの音を目を閉じて聴いていると、臉の裏側にモザイク状の文様が万華鏡のように動いて見えることがあります。自身の臉の裏側の血管等を見ているのだと思います。聴いている人の行動も関係あるでしょうけれど、空気の振動が聴衆の耳や身体に伝わった際に、複数の聴衆に見えたりすることがあります。もちろん、これは別にカルト的なものではなくて、身体的に(ホムスの音から)何らかの影響があるようです。ただ、儀礼的な場面で使われているということは、現代のサハの中では、ほとんどないと思います。

(柘谷) 儀礼的なものから芸能的なものへ、と司会からコメントがあったので、言葉のことで、今、思い出しました。

「演奏をする」という言葉の英語は play なんですね。play は、「遊ぶ」ことです。音楽起源説の一つに「遊戯本能説」というのがあります。実は、日本では「あそぶ」って言葉のもとは、「神さまとあそぶ」わけです。「あそび」ってのは、音楽を演奏すること、楽器を弾くことも「あそび」なんです。これ、日本の国も、アングロサクソン系の国も、同じかたちで単語を使っているというのは、非常に意味があると思われる。たとえば、直会（なおらい）といって、何か祭りのあった時に、お供えされたものを神さまとともに、いっしょに食べます。神さまと同化していく。食事や音楽や踊りで、一体化していく。その一体化していく相手の神さまがしだいに忘れられて、自分たちだけが楽しむ行動、いわゆる「遊戯」ですね、戯れるということに特化してきている。

そのへんの、神と人との境目がなくなっていく中で生まれてきて継承されてきた音楽の部分は、きっとあるんじゃないかな。「神楽」は、「神さまと楽しむ」って書くわけですよ、まさに。そういう、ことばを見ても、関連があるかな、と思いました。

（荏原） 先ほど、現在では儀礼的な場面でホムスを演奏しない、と言ったのですが、今の柘谷先生のお話とも通じるんですが、サハでは、個人的に神さまに何か語りかけたりするときにホムスを演奏することがあります。サハの世界観では、地面の下の死んだ人だとかマンモスとかお化けの世界、生きている人と動物の世界、神様の世界、という、大きく3つの層（世界）に分かれています。伝統的に、そして現在も、有名なホムシストだけでなく、ホムスを演奏する人は、神さまに語りかけたり祈ったりという形でホムスを演奏することもあるといわれています。

（柘谷） もう1つ。今、私たちはステージに上がっています。で、そちら（＝客席側）を向いています。ステージというのは、本来「祭壇」ですから。こっち（＝ステージ側）に神がいるから、客席を向いて神にお尻を向けて演奏するっていうのは本来はあり得ないんです。世界各地の演奏をみても、本来こっちに祭壇があって、祭壇を向いて演奏するはずのもの、装飾的なものがあるんだけど、結局「お客様に見てもらおう」ために、神に対して後ろを向く。そういうことが現在では当たり前になっているけれども、実はそうではない。こちらに背負っている、見えない、大きな力に対して交信をする。音楽にはそういう大切な要素があるというのは、強調しておかなきゃいけないですね。

（司会） ...そうですね。アイヌ民族の歌や踊りの中に、炉を囲んでの輪踊りがあるんですが、今でも、踊りながら上座の方に近づいて来たら、上座の神窓の方にくるっと向きを変えて踊るかたもいらっしゃるんですね。たぶん、「神様が通る窓に対してお尻は向けない」ということが日常的に伝承されているから、そういうことが行われているのかと思います。

8 復元された琴の音

（司会） 歌や踊りが、いわゆる娯楽としてではなく、非常に呪術的な部分、「セラピー」と荏原さんがおっしゃいましたが、癒す力がある。昔であれば、医療の技術を持っている人というのはそれだけで偉い人だったり、呪術師であったりしたわけですから。音を出すとは、要するに波動を出すわけですね。この特殊な波動のせいで、何だか気持ちがよくなる、と、生理的な部分で感知できる。たぶん悠久の昔から人間は、音の持っている力というものをすごく感じていたんじゃないか——と、3人のお話のなかから浮かび上がってきました。

現代は、いろんな音が氾濫していますから、かそけき音、微かな音に耳を傾ける機会がなかなかない。もっと昔は、今と違う音環境にあったと思うんですね。そういう中で、こんな音が鳴っていたのではないかとこの部分を深く研究なさっている荒山さんから、きつと話題が出てきますよ？（笑）

（荒山） はい（笑）。復元琴の前でお話します。今、いろいろな音が現代では溢れているという中で考えると、古墳時代の音というのは、どういう場所で弾かれて、どれぐらいの音の大きさであったかというのは大変興味深いところです。

（司会） ここで復元した琴を弾いてみては...

（荒山） はい。登呂遺跡の琴の復元品のように共鳴槽がついているものと、小黒遺跡の琴の復元品のように共鳴箱をもたない琴が、弥生・古墳時代の琴には見つかっています。音響を意識しているのかどうか問題になってくるのですけれども、共鳴箱を持たないものと、持つものがあることは分かっています。今、完全に復元した形でみなさんにご覧いただいています。発見されたときは破損していたり、欠損部があったり。そういう状況から、地道に復元して、こういう完成形をご覧いただいているということをご了解ください。絃の素材については、出土品に残っていないので分からないのですが、実験的にいろいろ張って試しています。今日は登呂遺跡の復元品には黄色い絹の絃とタコ糸を張った状態のものを、小黒遺跡の復元品には、タコ糸とテグスを張ったものを用意しています。これらも、さらに検討が必要ではありますが、ここで鳴らしてみたいと思います（♪試奏）。

いわゆる、いい音では...なくて、（♪試奏）。この構造からすると調絃がしにくく、各絃の間隔も狭いので、一音ずつを指で弾くというよりは、おそらく（♪試奏）こう、ヘラを用いるなどしてかき鳴らすような弾き方に適していたのではないかと考えています。...もう1つのほうの復元琴も鳴らしてみたいと思います（♪試奏）。おそらく、複数の絃を張っていますので、それぞれの絃の音の高さは変えて、こう、じゃらんと鳴らしたときにある程度いろいろな音が混じって響くというにはしていたと思いますけれども、今の箏のような、調絃をしてメロディを奏でるといえるのは、かなりこの構造では難しいのではないかと考えられます。

（司会） ...なんかこう、何か出てきそうな音ですね。

（荒山）（♪試奏）素材によってもまた音色は変わってくると思います。これからも関連諸分野の方々と議論しながら研究を深めて、さらに具体的に明らかにしていければと思います。

（司会） 私の感じ方ですけれども、「おっ？ 何だか呼ばれたぞ」という感じで神様が振り向いて出てきそうな音に感じられたんですけど。「楽器」というよりも、もっといろいろな要素を...雑音的な要素も含めながら、なおかつこういう共鳴箱を付けたりして、だんだん、今あるような楽器にしてきたわけですね、人間って。ちょっと不思議な感じがします。

9 自然が作った楽器、自然から作りだす楽器

（枅谷） プリントを2枚用意したので⁵、ちょっと時間ください。

まず「リコーダーよもやま話」と書いてある方を見ていただけますか。『季刊リコーダー』という、非常にマニアックな雑誌に書いたものです。珍しい雑誌ですが原稿料はくれない

(笑)。これ、書くの大変なんですよ、実は(笑)。

実物をお持ちできなかったのでプリントしてきましたが、「楽器は(人が)作るものなのか?」ということです。楽器は自然が作ったのではないかというところに、私の1つの考えがあります。最初から作ったのではない。

(配布資料中の) 図1はかなり長いもので、1メートル以上、もっと長いもので3メートルくらいある、オーストラリアの楽器です。これ、アボリジニのかたから直接売っていただいたものです。この楽器は、アリが作ったもので人間が作ったものではないのです。素材は、ユーカリというコアラが大好きな葉っぱの木ですが、先住民族のアボリジニの人たちは、この木を適当に切って、土の中に埋めます。埋めっぱなし。頃合いを見計らって、取り出します。そうすると、どうやら、シロアリがユーカリを大好きなようで、家だったら大変なことになりますけど。内側をくりぬいてます。だけど、まっすぐくりぬくわけじゃなく、あっち行ったりこっち行ったりするわけです。で、上の方をそれに合わせてうまく、木を剥いだり、つるつるにしていけます。そうすると、中も外も凸凹になるんです、ある程度。その上に、岩絵の具といって、岩を砕いた絵の具を塗ります。多くは、トカゲ。彼らは先祖をトカゲだと思ってますから、そういうのを描きます。

それから、右側の2つ。これは、北海道には自生していませんが、楽器の材料になる「柞(いす)の木」の、葉っぱなんです。どう見ても木の実みたいに見えますが、葉っぱにある種の虫が卵を産み付けると、なぜか膨らんでいき、パンパンになります。その中が、彼らの住処になります。成虫になった、羽化したときに、うまいぐあいにある1か所だけ丸く薄くなります。そこを齧って出てくる。その、丸い葉っぱが、木のところに釣り下がったままで風が吹くと、ヒョーって音がするわけです。この「ヒョー」ってところから「ヒョウの笛」「ひよんの笛」といわれます【写真10】。

「ひよんなどころから音がした」「ひよんなどころであの人に会った」というときの「ひよん」は、これが語源なんです。自然の力で音が鳴る。

...それから、ちょっと現物をお見せします。これ、堆積岩です。石狩の厚田から浜益あたりの海岸で、いくらでも採取できますが、自然に穴が開いたものです。穿孔貝といって、ドリルみたいに、自分の住処を作る貝がいたり。

あるいは、意外と知られていないんですけど、ウニ。ウニの稚貝は、トゲで身体を守っ



写真10 ひよんの笛

いす こぶ
(柞の木の葉瘤。アブラムシが寄生して膨らみ羽化後に穴があく)

ていますが、まだ守り切れないんで、自分の体液で石を溶かして穴をあけて...そうすると、... (♪試奏)、音、鳴りますよね。これ、大きなものだと、ある方向からある風が吹くと「ピー」と自然に鳴るわけです。昔から漁師さんは「このピーが鳴ったら船を出しちゃいけない」と。自然の中のサイレンですよね。

このように、楽器の起源のなかには、人間が作るうと思ったのではなくて、偶然、自然が作ってくれて。自然の中で音がするからなんだろうと思ったら、そういうものが目の前にあった、と。...ヨーロッパでは葦ですね。水辺に生える葦を、虫が食って、そこに風が当たって(笛の音に)。縦笛の部類は皆そう

ですけど、そういう風に楽器が生まれたと考えています。

もう1つ。音楽の起源とはあんまり関係がないですけど、考古学ではいろんなことが言われてるんですけども、(配布資料中の)図2は、「ネイチャー」という雑誌の表紙をだいぶん前に飾ったものです。9000年前の遺跡から出た、これ、まさにリコーダーなんです。穴が8つも開いています。ドレミファソラシドが全部出ます。間違いなく9000年前に音階の認識があった証拠です。

裏を見てください。(配布資料中の)図3です。笛の語源は「吹く枝」だという説があるんです。これ、実は私が作った(復元)もので、東北でずっと伝承されていっていましたが、昭和の初期に途絶えてしまいました。枝で作った笛です。「吹く枝」、「フエ」なんですね。クルミの木なんですけど、クルミは樹皮がものすごく固いから、それだけで笛になっちゃう。中の芯、これをうまく使って、まさにリコーダーなんです。一番下のは、その芯を動くようにして、トロンボーンみたいに「ビュー」と鳴るようになっています。ここに持ってきていますが、固くなって、音も出ない、動きもしないで、実際に演奏はできないです。

...と、自然が作った楽器、という話題でした。

(司会) ...楽器というものが、人為的なものではなくて、自然のおかげでできるものがあるというお話でしたね。一方で、たとえば金属口琴というのは自然にできるとは思えない(笑)。非常に手の込んだ、人為的なものとしての口琴について、荏原さん、何かありませんか。

(荏原) サハの人が、自然の大地から採掘される鉄を使って、どんなふうに音楽を作って、何を認識しているかについて、少しだけお話しします。

5年間ほど、サハ共和国国立高等音楽院(大学)というところで、フルートを教えながら、ホムスの調査をしておりました。私が勤めていた音楽院では、伝統的な家屋(バラガン)が、学内に作ってあります。ここでは6歳~大学生までがクラシック音楽を専攻し、モスクワ音楽院等に進学する学生もいます。だけど、こういうふうに、自分たちの伝統音楽もしっかり勉強できる環境が整っています。私が教えた、フルートを専攻している生徒の中にも、ホムスをしている子がいました。

自然、大地から出てきた鉄を、鍛冶師が加工してホムスを作り、ホムス演奏家がサハの自然をテーマにした曲を演奏し、ホムスの弁を使って話す、歌い上げる。それを聴衆が聴いて、サハの自然を再認識する。サハの自然をホムスという楽器を通じて再認識するサイクルがあるということについて、詳しくは、論文「口琴ホムスを通じてみたサハの自然と人」を2015年3月に刊行予定です⁶。

サハの音世界には実に多様な在り方でホムスが存在しています。コンサートで、子供たちがホムスを練習する音、携帯電話の着信音として、テレビやラジオのコマーシャル音としてなどホムスの音は日常生活に満ち溢れています。その中には上記のような自然認識のサイクルも含まれていると私は考えています。

また、さっき言ったような個人的な営み——自分につらいことがあったりしたら神様に語りかけたり祈ったり、言葉では伝えられないような恋人への思い、悲しかった出来事などを、ホムスで話す、ホムスで演奏することが行なわれてきました。全ての人が行なっているわけではありませんが、現在も行なわれています。

(司会) 荒山さん、補足事項でも何でもどうぞ。

(荒山) はい。ここに、復元したもの2点を紹介しましたが、現在、弥生・古墳時代の遺跡で琴が何点ぐらい見つまっているかというと、100点を超えました。実はこのことは、すごいことだなと思っています。木の道具は遺跡になかなか残りません。低湿地遺跡という、かなり限られた遺跡の環境でしか木の道具は出土しない。そのような状況で、弥生時代・古墳時代の琴が100点を超えて出土しているということは、儀礼の道具の一つとして使われるという、そういう状況にあったということが、ひとつ、考古学からわかることとして、大事なところだと考えています。

それから、先ほど少し素材の話がありましたが、琴の木の種類、弥生・古墳時代ではスギが多くみられます。現在の琴はキリで作られています。使う木の種類が変わっているのですよね。一方、機能的にはあまり関係なさそうな突起を作り出すところは変わらずに残っている。変わっていく部分と残していく部分とが見られるのです。2000年という長い時間軸ですけれども、その中で、こだわって残された部分、そして変わってきた部分が何なのか、これからも、探求していきたいと思っています。

10 閉会

(司会) 今日は、話がどちらの方向にどう流れるか、私自身も予測がつかなかったもので、休み時間も取らずに2時間、来てしまいました。鼎談の「鼎」は「かなえ」で、考古学とも関係があります。辞書を引きましたところ、「鼎の沸くがごとし」という言い回しがあるそうで、「鼎の中の湯が沸くように、議論がはなはだしいさま」という意味だそうです。本日はまさに鼎の沸くがごとく、話題がさまざまに盛り上がってよかったです。

司会が不慣れなため、お聞き苦しい点もあったと思いますがお許してください。本日は皆さん、ご来場ありがとうございました。(会場拍手)

11 質疑応答

鼎談後は会場からの質問を受け付けた。以下は質疑応答の要約である。

(質問1) 弦楽器(弦鳴楽器)の中に、トーキングドラムのように、言葉の代わりをする機能のあるものはあるか。

(荒山) 祭祀・儀礼、神事(神託)的な用途において「琴」を使った、ということは推測できる。

(拵谷) 弦楽器で明確に言葉の代替をおこなうといった例は聞いたことがない。

(司会) 擦弦楽器ならあり得るかもしれないが、撥弦楽器では難しいのではないか。

(質問2) ホムスは金属口琴だが、金属の精錬技術が生まれる前は何でできていたのか。

(荏原) 木製だったのではないかとも言われている。

(質問3) 他の動物、たとえばネコなどの鳴き声を模した笛はないのか。

(拵谷) クマの笛、フクロウの笛などいろいろあるが、それはその動物をおびき寄せて狩猟するために鳴き声を模している。おびき寄せて狩猟するための笛と

しては、ネコの声の笛という例は聞かない。歌舞伎の下座音楽ではいろいろな動物の擬音を出すものがある。

(質問4) サハ(民族の移動)は、モンゴル帝国の侵攻のため北方へ押し出されたという見解もあるが、ホムスが木製から金属製になったのは、北方では材料となる木がなかったためではないか。

(荏原) 可能性はいろいろ考えられるが、検証は非常に難しい。

(質問5) 弾琴埴輪の左手は絃を押さえているのか。

(荒山) 弾琴埴輪に表現された左手の位置が実際に絃を押さえているところを表現したものであるのか、デフォルメされているのか、その判定は難しい場合が多い。押さえている可能性のある表現もある。また、右手に棒やヘラのようなものを持っている例があり、その場合も、絃を鳴らす右手に対し左手で絃を押さえた可能性はある。

注

- 1 荒山千恵 2014年『音の考古学—楽器の源流を探る』北海道大学出版会
- 2 荒山(2014:72)
- 3 荒山(2014:69)
- 4 荒山(2014:103,211)
- 5 当日配布資料の出典は、次のとおり。
 - ・ 柘谷隆男 2000年 笛を求めて～音楽の源流を探る旅1「序章・笛とは何か」『教育音楽中学高校版』44(1) 音楽之友社
 - ・ 柘谷隆男 2012年 リコーダーよもやま話3「笛は“自然”が作った～石笛(いわぶえ)のおはなし」『季刊リコーダー』2012秋号 Vol.5 歌う!奏でる!プロジェクト
 - ・ 柘谷隆男 2013年 リコーダーよもやま話6「ひょんなところから音が～虫が作った笛」『季刊リコーダー』2013夏号 Vol.8 歌う!奏でる!プロジェクト
- 6 檜山哲哉・藤原潤子(編)2015年『シベリア 温暖化する極北の水環境と社会』京都大学学術出版会

(こうち・りえ/北海道立アイヌ民族文化研究センター)